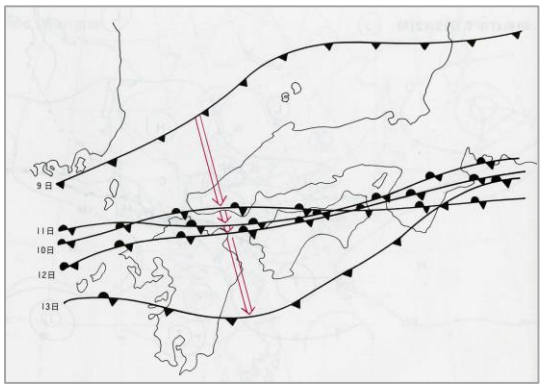
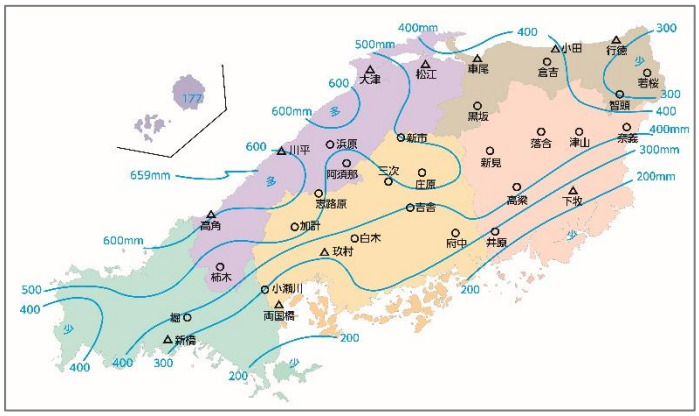
昭和 47 年 7 月豪雨　【昭和 47 (1972) 年 7 月 9 日～13 日】

■気象の概要

北日本にあった梅雨前線は、9 日から 13 日にかけて南下し、九州北部、中四国から本州南岸に停滞しました。また、南海上の台風の影響で前線の活動は活発となり、大雨域は前線の南北振動により日中は日本海側、夜間は中国山地の南側に現れました。このため、7 月 9 日から 13 日にかけての雨量は、島根県沿岸部や中国山地で 600mm以上、瀬戸内海側でも 300mm以上に達しました。気象庁は、全国に大きな被害をもたらした 7 月 3 日からの一連の大雨を「昭和 47 年 7 月豪雨」と命名しました。



梅雨前線の移動（9 日～13 日）



総雨量分布図（9 日～13 日）

■被害の状況

中国地方では、広範囲に渡って多くの雨量があったため、多くの河川で過去最大の水位、流量を観測し、江の川をはじめ氾濫により各所で大規模な浸水被害が発生しました。また、山間部では土砂災害も多発し、死者・行方不明 100 名に達し、住家被害も 11 万 5000 世帯以上に及ぶ激甚な大災害となりました。

このため、鳥取県を除く 4 県で、計 73 市町村（当時）に災害救助法が適用されました。

桜江大橋付近の江の川出水状況（島根県江津市桜江町川戸）

広島県三次市十日市　馬洗川破堤箇所

島根県、出雲平野の浸水状況

広島県安芸太田町旧加計駅付近の被災状況

【この項の災害状況写真出典は建設省中国地方建設局「昭和 47 年 7 月豪雨災害誌」ほか】

■各県別の主な被害

区分		単位	鳥取県	島根県	岡山県	広島県	山口県	計
人的被害	死　者	人	0	26	16	35	17	94
	行方不明	〃	0	2	0	4	0	6
	負傷者	〃	1	79	43	105	52	280
住家被害	全　壊	戸	1	559	270	349	72	1,251
	半　壊	〃	3	1,235	517	2,170	119	4,044
	一部損壊	〃	23	656	490	486	8,979	10,634
	床上浸水	〃	400	11,845	4,251	5,169	2,632	24,297
	床下浸水	〃	3,897	26,449	14,194	11,031	19,455	75,026
その他	道路損壊	箇所	781	6,531	4,747	5,646	3,028	20,733
	橋梁流出	〃	29	127	295	329	58	838
	堤防決壊	〃	436	－	5,399	－	3,192	9,027

（出典：中国地方建設局「昭和47年7月豪雨災害誌」）

災害の記憶を伝える

江の川の氾濫、堤防決壊などにより市街地のほとんどが大きな浸水被害を被った広島県三次市内には、当時の浸水位を示す表示板が 57 箇所設置されています。

三次市内の浸水位表示板

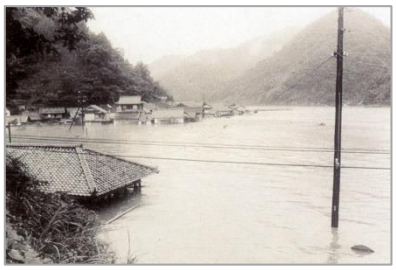
島根県邑南町下口羽には、背面に水位を刻んだ「大洪水碑」が建てられています。

邑南町の大洪水碑

背面に刻まれた水位

災害のない明日を目指して

大きな被害を受けた江の川沿いでは、山間部の狭い平地に立地する集落を洪水から守り、貴重な生活空間を減少させないように、それまでの築堤方式に替え宅地・道路などの嵩上げ方式を採用し、地域づくりを取り込んだ治水事業を展開するようになりました。



広島県三次市作木町港地区の浸水状況

嵩上げ方式による改修完成後の港地区

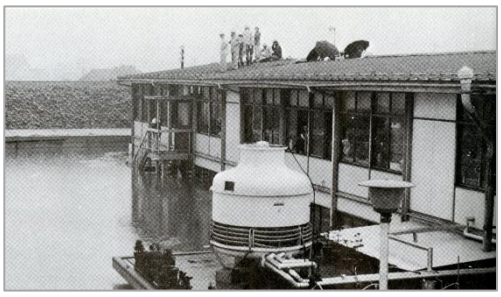
トピックス

■石造りの防災施設に見る先人の知恵

●聖地の助磊（せいちのたすけごろ）

江の川支流、美波羅川が流れる広島県三次市三和町敷名には、江戸時代に造られた防災施設の「聖地の助磊」が残っています。石組みした土盛りに柿の木が植えてあり、洪水時には土盛りに登り、木に体を縛り付けて難を逃れたと伝えられます。木曽三川の地域では「命塚」と呼ばれ、広義の「助命壇」の一種です。

聖地の助磊（広島県三次市三和町敷名）



昭和 47 年 7 月災害時、事務所の屋根に避難する建設省職員（広島県三次市十日市西）
状況は違うが助磊はこういうイメージの役割

●高梁川の猿尾堤（さるおづつみ）

岡山県総社市原（水内橋下流）や高梁市落合町（落合橋下）の高梁川河岸には、蒲鉾状の石組みの水制工、猿尾堤が残っています。その形が猿の尾のように見えることに由来する猿尾堤は、本堤防から斜めに突き出し洪水流の勢いを弱め、本堤防や船着き場を守る役目を持っていました。本場の木曽三川地域では、本堤から垂直に突き出したものもあります。高梁川の猿尾は、江戸時代に基礎が築かれた後も補修の手が加えられ、平成 30 年の西日本豪雨の際にも堤防の防御に効果があったと言います。

水内橋下流の猿尾堤（岡山県総社市原）

落合橋下の猿尾堤（岡山県高梁市落合町）

●坪野の水刎（みずはね）

太田川の中流に位置する広島県安芸太田町坪野には、川に張り出した三角形の石組み水制「水刎」が残っています。対岸の亀石に衝突し跳ね返る洪水に悩まされてきた坪野では、それに対抗するため亀のような形の水刎を古くから築いてきました。現在残っている水刎は、江戸時代末期に広島藩の藩営工事で造られ、加工した切石を精緻に組んで築かれています。

坪野の水刎（広島県安芸太田町坪野）

基底部の自然石と石積みの接合部
6 個の楔石で頑丈に留めてある。